

氏 名(国 籍)	ディヴィア ジンダル (イ ン ド)		
学 位 の 種 類	博 士 (心身障害学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 1,616 号		
学位授与年月日	平成 9 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	心 身 障 害 学 研 究 科		
学 位 論 文 題 目	Generalization and Maintenance of Social Skills of Children with Visual Impairment: Effectiveness of Self-management Procedures (視覚障害をもつ子どもの社会的スキルの般化と維持：セルフ・マネージメントの効果)		
主 査	筑波大学教授	瀬 尾 政 雄	
副 査	筑波大学助教授	文学博士	山 本 真理子
副 査	筑波大学助教授	Ph.D.	岡 部 克 己
副 査	筑波大学助教授	加 藤 元 繁	

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は視覚に障害をもつ子どもの社会適応について、社会的スキル訓練プログラムの実施と、さらに行動論的セルフ・マネージメント法によって、これまで問題とされてきたその般化と維持の効果を検討しようとするものである。

挨拶や視線を話し手の方に向けるといった社会適応上のさまざまなスキル、すなわち社会的スキルは主に視覚的モデリングや相手からの視覚的フィードバックによって形成される。したがって、視覚障害者は社会適応上多大なハンディキャップを負うことになり、これまで成人用の種々の社会的スキル訓練プログラムが開発されてきた。しかし、これらのスキル訓練の超早期からの導入の必要性が指摘されているにも関わらず、視覚に障害をもつ子どもを対象とした訓練に関する報告はほとんど見られない。さらに、視覚障害青年を対象とした社会的スキル訓練に関する研究においても、長期にわたる効果の維持や場面間の般化を検討したものは皆無である。本研究は、これらの未検討の問題を、行動的セルフ・マネージメント法の導入によって実証的に検討し、さらにこれらの技法の理論的な成分分析を行ったものである。

本論文は以下の 5 章から構成され、6 の実証研究が含まれている。

第 1 章 はじめに：視覚障害をもつ子どもの社会的スキルの発達とスキル形成のための介入法、ならびに般化と維持に関する問題点、さらにセルフ・マネージメント法の導入の意義

第 2 章 社会的スキル形成のための介入変数の同定：自己評価手続きの効果（研究 1～3）

第 3 章 自己評価と環境からのフィードバックの関係の分析（研究 4～6）

第 4 章 討論

第 5 章 今後の課題

次に各章の概略を述べる。

第 1 章 はじめに：視覚障害をもつ子どもの社会的スキルの発達とスキル形成のための介入法、ならびに般化と維持に関する問題点、さらにセルフ・マネージメント法の導入の意義

視覚に障害をもつ子どもへの教育と関連する問題を概観し、社会的スキルの重要性和そのハンディキャップが及ぼす問題を論じた。さらに視覚障害以外の分野での社会的スキル訓練とその研究の展望をおこない、特に従来

の研究において訓練効果の般化と維持に問題があること、これを克服するために行動論的セルフ・マネージメント法が有効であること、外的なフィードバックの機能の分析が必須であるとの指摘をおこなった。

第2章 社会的スキル形成のための介入変数の同定：自己評価手続きの効果（研究1～3）

インドの統合教育学校に在籍する7歳から11歳までの視覚障害をもつ子どもを対象に、多層ベースライン・デザインを用いた単一事例研究法によって、社会的スキル訓練を実施した。標的となる社会的スキルはそれぞれ心理検査、保護者と教師へのインタビュー、行動観察等のアセスメントバッテリーによって決定されている。

研究1：訓練プログラムの独立変数として、仲間から対象児への社会的スキルの評価、訓練者からのプロンプト、強化が導入され、般化と維持に及ぼす効果を検討した。介入期におけるスキルの増加、常同行動の減少が確認されたものの、維持の効果がみられず、外的制御ではなく、自己制御の必要性が示唆された。

研究2：獲得されたスキルの般化と維持に及ぼす自己評価手続きの効果について、外的制御（外的強化・仲間強化）との比較を行い、自己評価手続きの高い機能と仲間からのフィードバック成分の重要性を確認した。

研究3：自己評価手続きにおける仲間からの評価の要素の効果と、言語化の効果を検討したが、自己評価がスキルの般化と維持に効果的であることは確認できたものの、デザイン上の問題から仲間評価と言語化の機能についての分析に問題が残された。

第3章 自己評価と環境からのフィードバックの関係の分析（研究4～6）

研究4：外的な強化を伴わない場合の自己評価手続きの効果とフィードバックの機能について検討し、視覚的手がかりを要しない社会的スキルの獲得、般化、維持についての自己評価手続きのみの効果を確認した。しかし、視覚的手がかりを要するスキルにおいては、聴覚的・身体的なフィードバックが必要であることが明らかになった。

研究5：訓練者からのプロンプトに基づき、適切なフィードバックが与えられるように環境側への介入を行い、さらにこのフィードバックの自己評価の正否に及ぼす効果を検討した。この結果、自然な随伴性下でのフィードバックの重要性が確認され、セルフ・プロンプト手続きの機能の検討の必要性が示唆された。

研究6：環境からのフィードバックを得るためのプロンプトを対象児自身が自発する訓練と、環境側へのフィードバックの自発の訓練、さらにこれらが対象児の自己評価に及ぼす効果を検討し、セルフ・プロンプトとフィードバックの自発訓練の般化と維持に及ぼす高い機能を明らかにした。

第4章 討論

セルフ・マネージメント手続きが視覚障害をもつ子どもの社会的スキルの獲得、般化、維持において外的制御よりもはるかに高い機能を持つことを明らかにしたが、さらに視覚障害をもつ子どもにとっての自己評価の概念が晴眼児とくらべて異なることが発見された。すなわち、晴眼児にとっての自己評価は、それ自体がフィードバックとして機能するが、視覚に障害をもつ子どもにとっては、それが視覚的手がかりを必要としない場合にのみフィードバックとして機能し得ること、視覚的手がかりを必要とするスキル、たとえば話し手の方に顔や体を向けるとか、微笑といった行動については環境からの適切かつ有意なフィードバックが必要であることが明らかとなった。

第5章 今後の課題

フィードバックの機能と関連して、環境内にある自然な随伴性分析の必要性と、このフィードバック情報を視覚に障害をもつ子どもにとって理解が容易なものへと変容させるための方法の必要性を指摘し、教師の役割とモデリング手続きの機能の関連について残された問題について論じた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

これまで、視覚障害者を対象とした社会的スキル訓練の重要性が、社会適応の観点から繰り返し指摘されてき

たにもかかわらず、視覚に障害をもつ子どもを対象にした検討は進められてこなかった。しかも、盲学校や福祉センターで行われた訓練の効果の長期にわたる維持と、さまざまな場面への般化機能についてはまったく分析されてこなかった。本研究は行動論的セルフ・マネジメント研究の分野で近年著しい成果を上げている行動の形成と維持に及ぼす自己制御理論の視点を、視覚に障害をもつ子どもたちの社会的スキル訓練の領域に導入することによって、これらの未開拓の研究領域に新しい知見をもたらしたものであり、教育ならびに福祉への応用の可能性からも高く評価できるものである。

今後の課題にも指摘されているように、環境からのフィードバックの機能を明らかにする必要性、特に随伴性分析を行っていない点、あるいは自己評価手続きを維持している変数等についての分析が不十分であると言った問題は残るものの、この論文の主要な主張点であるセルフ・マネジメント手続きと環境からのフィードバックの要因の重要性を明らかにしたことは、単に理論的な行動変容のモデルの検討のみならず、近年叫ばれている統合教育あるいはインクルージョンの理念としての障害児と健常児の相互作用の視点にも合致し、障害児研究の分野に新たな知見とパラダイムをもたらした意義は大きいと考えられる。

よって、著者は博士（心身障害学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。